

## 参考・応募論文

### 米蔵（ヨネゾウ）風一目均衡表の考え方

株式会社フジトミ米蔵塾  
塾長 米倉 教公

#### 1. はじめに

一目均衡表については、様々な著書や一目山人こと故細田悟一氏のお弟子さん達により多くの投資家に広まってきました。私も投資を始めた20代前半から一目均衡表を使ってきた『いち投資家』でもあります。ただ、使っていて疑問に思ったり、どうすれば一目均衡表を使って、より相場に勝てるかを模索し工夫してきました。そのため、一目均衡表を愛する諸先輩方々から、一目均衡表の真髄「時間論」や「波動論」を理解していないのに「神聖なる一目均衡表を語るなれ」とお叱りの言葉を頂くことになるかもしれません。また、今までの投資実践のなかで私なりの解釈内容となっていますので、間違った解釈をしている部分も多々あると思います。しかし、これから投資を始める初心者の方や一目均衡表を使ったことがない投資家の方にも、一人でも多くの投資家に一目均衡表に興味を持って頂き、これからも世に広まればと思い、敢えて筆をとることとしました。

一目均衡表は「時間論」、「波動論」、「水準論」の三論を骨格として展開されていますが、今回は一目均衡表チャートを中心とした内容にしました。

また、「新東転換線（一目均衡表）」が昭和10年に発表された当時と、アルゴリズムが台頭する現在では相場のスピード感も雲泥に違いますし、昨今のボラティリティの高さも違っています。そして、より大きな違いは眠らない市場ということ

です。株式会社フジトミで毎週土曜日に開催している「米蔵塾」でも「今日の含み益は、明日の含み損」が口癖になってしましました。そのような相場環境のなかでも、一目均衡表で対応できるということが少しでもお伝えできれば幸いだと思います。

私の思考の原点は小学校時代にあります。私は小学校時代から、今あるものをちょっと工夫することでより使いやすくしたりすることが好きでした。小学校時代には杉並区立科学博物館の創意工夫展に2回ほど出展しました。今では東京でハエを探すのが大変なほどですが、子供の頃は夕飯時の食べ物にハエがつかないように見張り番をしていました。毎日ハエ取りをしていたのですが、ハエの残骸をとるのが嫌でした。その時手を使わずにハエの残骸をとれないかと考え、『便利なハエタタキ』を出展しました。仕組みは簡単なもので、ハエタタキの縁に下敷きを切って縁にはりつけ三角形になるようにしました。こうすることで、ハエを叩いた後に縁を縦にして三角形になったところでハエの残骸をあてると三角形になっているので、残骸が挟まりそのあとにゴミ箱の縁で何回か叩くとハエの残骸が落ちるというものでした。これは大成功でした。もうひとつは、子供の頃は環八沿いに住んでいたので、トラックが多く通りました。大型トラックが通ると地震なのかトラックの振動なのか分からぬという状態でした。たまたま自転車のブザーがあったので、振り子が触れるとブザーが鳴るようにした『地震探知機』を

作りました。この地震探知機は家が揺れるとなるものでしたが、大型トラックが通ってもブザーが鳴ってしまうので、はっきり言って失敗でした。この他にも濡れない傘を考えたりもしましたが、当時予算が足りずにあきらめました。このように、小学校時代から今使っているものに一工夫することで、より使いやすいものになるかを考えていきました。そのため、相場の世界に入っても、子供の頃からの好奇心は止まらず、基本的な理論を出来るだけ崩さずトレンド指標の組み合わせや、オシレータの数字を変更することで、より相場の流れをつかめるのではないかと工夫をしてきました。その中のひとつが一目均衡表です。

米蔵風としたのは、回転すしなどに行くと本当のアワビではないけれど、アワビもどきのすしネタがあったり、本当のウニではないけれど、ウニの軍艦巻きがあったりします。それなりに安く美味しく食べられるものです。私が考える一目均衡表も本物ではないけれど、「もどきはもどき」らしく美味しく食べられれば良いというものです。相場の世界なら「もどき」でも勝てるチャートならば良いと思います。

今回資料として掲載したチャートは、一目均衡表を分析するうえで、時間軸で一番マッチしていると思われる日足を中心に掲載しました。

最後に、何かひとつでもみなさまの投資活動において参考になれば幸いです。

チャートシステムは Win Station を使用し筆者が作成しました。チャートにおける著作権は(株)オーバルネクスト社にあります。

## 2. 分足について

一目均衡表の話しに入る前に、ちょっと寄り道して、デイトレードに使用する分足について解説します。デイトレードするにしても、当然に日足、週足、月足のトレンドの確認は必須です。日足、

週足、月足でトレンドが上昇なのか下降しているかをイメージとして持った上で、短期的に売りでも買いでも動いた方に売買するからです。

中期的に上昇トレンドなのに売り持ちでエントリーすることもありますが、イメージがないと深追いして大けがのものになります。一方買いから入って思惑通りになれば、オーバーナイトでポジションを保有することもできます。もちろん、日足、週足、月足を用いて売買するデイトレ投資家はいないと思います。

当然分足で売買をするわけですが、売買に関するインターフェイスで一般的なものでは、5分足、15分足、30分足、60分足、240分足などが既定値となっています。5分足や15分足はきりが良いというだけで、全く理論的なものはありません。それでは何分足が良いかですが、私の場合は4の倍数の分足を利用します。FX取引している投資家で60分足と240分足は信頼度が高いという話を聞きますが、この分足も4の倍数だからです。それでは何故4の倍数なのでしょう。それは、地球は24時間で1周(360度)します。我々はその地球というところで取引しているのですから、その自転に影響されると思っています。要するに地球が1度緯度が変化するのに4分(24時間×60分 = 1,440分、1,440分 ÷ 360度 = 4分)かかります。そのため、緯度の変化が人間心理にも影響すると考えます。ですから緯度の変化に合わせた足を見ていくことが合理的であると思います。ちなみに60分足は地球が15度、240分足では60度動いた時にロウソク足が一本立つことになります。私の場合は、為替を見る時は、16分足60分足、240分足を中心に見ています。デイトレードでもそれぞれの投資家によってトレードの時間枠が違いますので、4の倍数足を色々変えて自分に合った分足を探すことが大事です。そのため、色々と分足を変えて試してみることをお勧めします。時間足はそれを使う投資家

の性格の違いにより、変化するものと思われます。一日に何度も取引をしないと気がすまない投資家ならば、より短い時間帯を利用し小さな利益の積み重ねトレードとなります。また、チャンスのみだけトレードする投資家であれば、やや長めの時間足でトレンドにのるために何日もトレードしなくとも良い気の長い投資家向けです。ですから、まずは自分の性格と投資スタンスにより自分に合った時間足を見つけることです。投資においての初めの一歩と考えます。

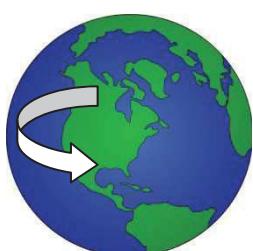
### 3. 何故 240 分足（4 時間足）なのか？

1 日を 4 時間ごとに分割すると、24:00～4:00 は NY 勢中心相場となり、為替もロンドンフィギング決定（夏時間：24:00、冬時間：01:00）のため大きく動くことが多いことが原因と考えられます。4:00～8:00 は NY 勢が引きウェリントンやシドニー市場はオープンしているものの、参加者が少なくトレンドを作り切れず市場の休憩時間となります。8:00～12:00 は日本勢が参入することで、投機家の思惑相場が作られていきます。そして徐々にアジア市場がオープンすることでトレンドが作られやすくなります。

す。12:00～16:00 は東アジア全員参加の時間帯となり、トレンドが作られやすくなります。16:00～20:00 は欧州勢の思惑で動く時間帯です。そのため、アジア市場のトレンドが反転することや加速することが多々あります。20:00～24:00 は欧米市場全員参加の時間帯となります。このように、一日を 4 時間毎に小分けしていくと、時間帯によって参加者が違うことが分かります。ですから 240 分足が市場の変化を見て行く上で非常に有効と考えられます。ここから本題にはいります。

### 4. 一目均衡表と中心値について

中心値は一目均衡表を使ううえで非常に大事な考え方です。中心値は、ある期間においての売買による損益分岐点となります。損益分岐点の価格の上下の動きで買い手に含み益が生じているのか、それとも売り手に含み益が生じているのかが判断できます。ギャン理論でも大底・天井からの半値戻し・半値押しが非常に大事なところであると言っています。ただし、大底や天井からの半値は時間軸が止まっている状態からの半値となります。しかし、一目均衡表は時間の経過とともに半



地球は 24 時間で 360 度回転、取引はその地球上で行われている。そのため緯度が 1 度動くことで人間の心理にも影響するのではないか？

$$24 \text{ 時間} \times 60 \text{ 分} = 1,440 \text{ 分}, 1,440 \text{ 分} \div 360 \text{ 度} = 4 \text{ 分}$$

緯度 1 度動くのに 4 分かかる

分足は 4 の倍数がベストマッチ

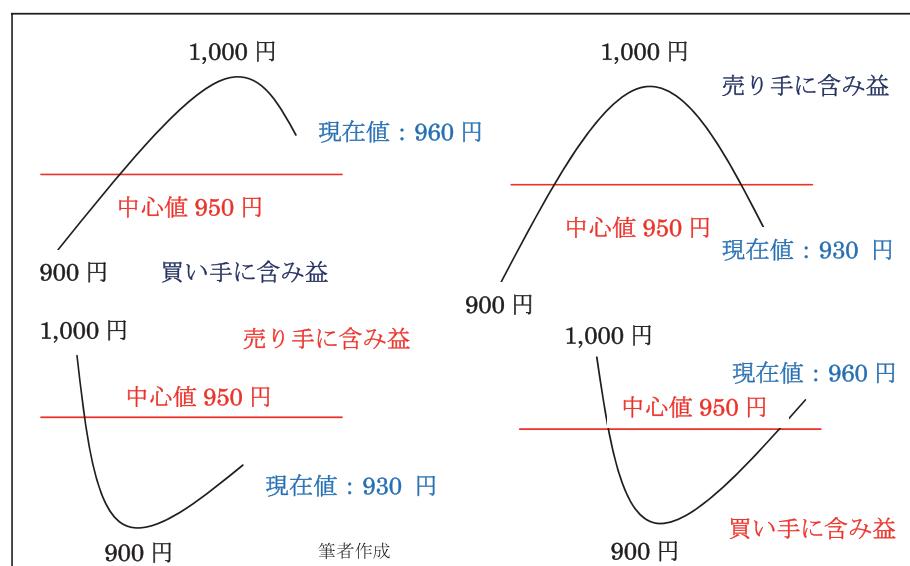


値の位置が移動するということころが大きな特徴です。例えば、現在の価格の位置が転換線の上にあるものの、基準線の下にある場合は、短期的（転換線）には買い手に利益があるものの、中期的（基準線）には含み損になっていると判断することができます。例を出して説明しますと、株価が900円から1000円に上昇し、その後980円まで下落したとします。900円と1000円の中心値は950円です。900円から1000円までの売買の平均値となりますので、現在の価格が980円ならば、まだ買い手に含み益があるということになります。その後、価格下落が継続し930円まで下落すると、今度は売り手に含み益が生じることになります。逆に1000円から900円に下落し、その後930円まで戻したとします。やはり中心値は950円です。この時点では売り手に含み益があります。しかし、960円まで戻りがあると、買い手に含み益が生じることになるわけです。一目均衡表はこの中心値の時間帯を利用した分析方法であるということです。要するに今の価格が買い手に優位な位置にあるのか、それとも売り手に優位な位置にあるのかを分析することになります。この考え方を踏まえて一目均衡表の説明をしていきます。

### 転換線9に転換線5を加えると

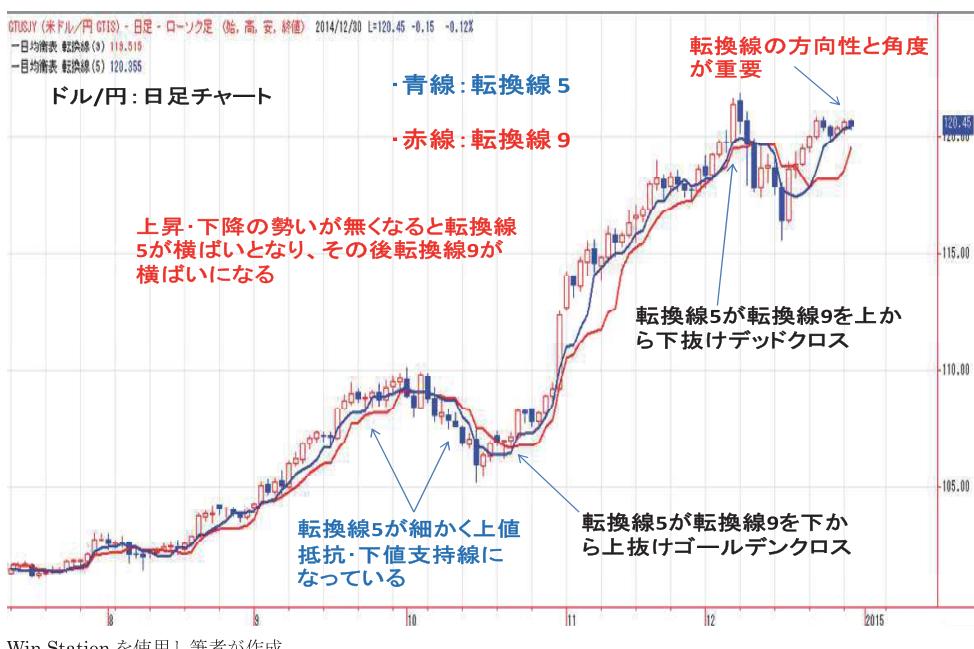
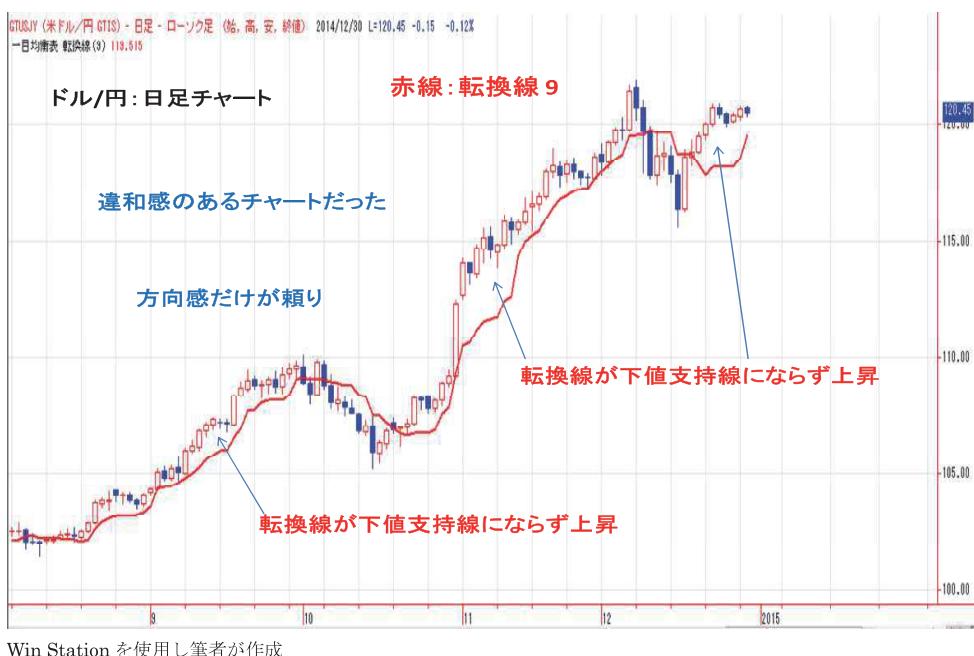
一目均衡表では転換線9があります。転換線9は、当期間を含む（過去9期間の高値+安値）÷2で求めます。要するに9期間における中心値であるということです。ところで、転換線が下値支持線になったり、上値抵抗線になったりすると記述されている著書が多くあります。しかし、一目均衡表を見ていると、転換線9に届く前に反転してしまうことが多くあり、私は、このことに長い間違和感を持っていました。多分そう思われている方も多いのではないかと思います。そのため、色々と転換線の数値を変えてみたところ、転換線5に行きつきました。転換線5は、当期間を含む（過去5期間の高値+安値）÷2で求めます。しかし、転換線9を排除して転換線5だけでは、やはり違和感があります。そのため、転換線5と転換線9を併用することで、長く続いている便秘が解消したように違和感が消えました。見方は①転換線5と転換線9の位置関係を見てていきます。転換線5が転換線9の上にあるのならば、上昇トレンドとなります。また転換線5が転換線9の下にあれば下降トレンドになります。これは移動平均線と同じ考え方です。

②転換線5が転換線9を下から上に抜ければゴー



ルデンクロス、転換線5が転換線9を上から下抜けすればデットクロスとなります。今まででは、転換線9と基準線との間での上抜け・下抜けを見ていましたが、それではかなり上昇したところ、またはかなり下降したところまで待つ必要があるので、転換線5の追加により早い売買が可能となりました。しかしながら、ダマシもありますので、その際は早目のロスカットが必要となります。

す。ロスカットは一旦抜けた転換線が再び上抜け・下抜けしたところとなります。③そして、転換線の方向も非常に大事な売買要因となります。転換線5と転換線9が共に上向きならば上昇トレンド、共に下向きならば下降トレンドと判断出来ます。転換線5が横向きながら転換線9が上向きや転換線5が下向きながら転換線9が横向きというバラバラな動きとなった場合は、今までのト



レンド相場に勢いがとなって来ている可能性があります。そのようなバラバラな動きになら、逆張りの準備に入ります。要するに期間の短いところで中心値が変化したこととなるからです。

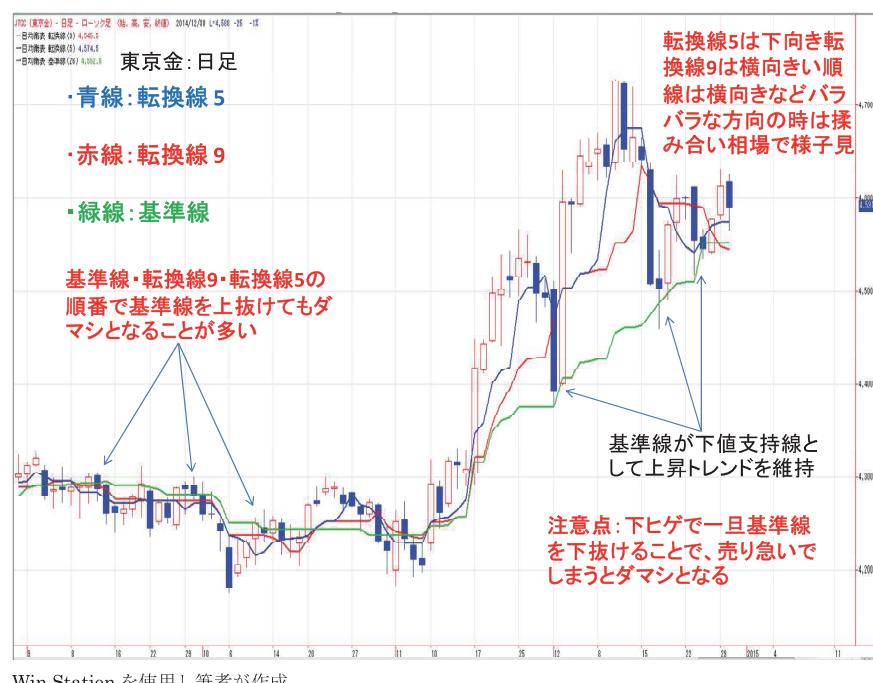
## 5. 基準線と転換線の「好転」と「逆転」

基準線は、当期間を含む（過去 26 期間の高値 + 安値）÷ 2 で求めます。要するに 26 期間においての中心値ということになります。基準線は転換線と同様に上値抵抗線・下値支持線になることがあります。これは、過去 26 期間の高低の中心値が抵抗帯となっていることです。ここでのトレードの難しさは、価格が一旦基準線を上抜け又は下抜けした時点で、上ヒゲや下ヒゲで反転してしまうところにあります。上抜け又は下抜けした時点でトレードした場合、再び基準線まで戻ったところでロスカットする必要があります。また、転換線と基準線の関係を教科書的に言いますと、転換線と基準線を下から上へ抜けますと「好転」、逆に転換線が基準線を上から下へ割り込むことを

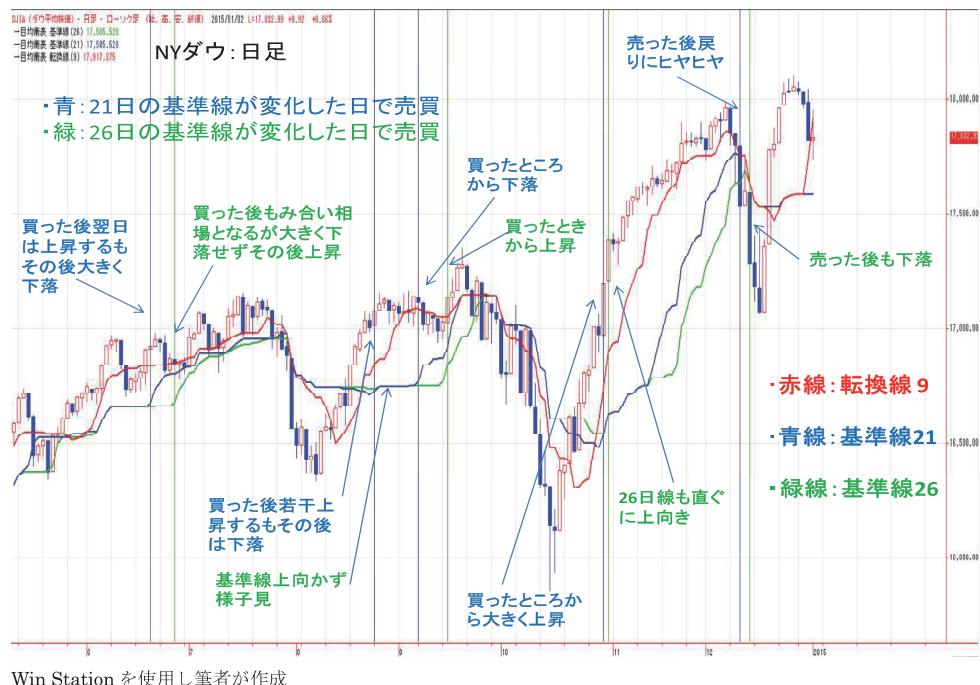
「逆転」と言います。好転を買い転換、逆転を売り転換とします。一般的な一目均衡表では転換線 9 と基準線での好転や逆転まで待つ必要がありますが、転換線 5 を加えることで、転換線 5 と転換線 9 がクロスした後、転換線 5 と転換線 9 の順番で基準線を上抜け又は下抜けすることになります。ここで大事なことは、基準線の方向が好転なら上向き、逆転なら下向きになることです。ですから、転換線 5 と転換線 9 が基準線を上抜けしたうえで、3つのラインが上向きであることです。また逆転はその逆になります。常に3つのラインの方向性を意識して見ていく必要があります。転換線が上方向でも基準線が横向きなどバラバラな動きをしているときに揉み合い相場となることが多く、トレードが出ていない状態でありトレードせずに様子を見ることが肝要です。

**基準線の 21 期間と 26 期間どちらが有効か？**

一目均衡表が発表された当時は土曜日も市場が開いていたことや、祝日も少なかったことから、昨今では1ヶ月を21日と考えて、基準線の期間を26日よりも21日の方が理論的に合うのではないか？との疑問が湧きます。そのため、どちら



Win Station を使用し筆者が作成



が一目均衡表に合うかを検証してみました。検証方法は基準線が上向き又は下向きになった日に売買します。当然に短い期間の 21 日の方が転換線との好転・逆転も早く、売買サインが早く出ます。しかしながら、期間 21 日は売買サインが早すぎて、含み損を抱える可能性が高くなります。利益が出る前にロスカットしてしまって、その後上昇という投資家にとっては最悪のケースにもなります。ただ、一気に上昇・下落した際には、当然に早いシグナルを出す 21 期間の方が大きな利益となります。しかし、相場では売買した時から利益が出た方が良いことは確かです。そういう観点からみると、期間 26 日の方が売買した後での結果が出やすく、現代でも期間 26 日が有効であると思料します。

## 6. 転換線との相性比較

転換線と基準線がクロスすることで『好転・逆転』となります。転換線との相性を他の移動平均線との比較から検証しました。移動平均線は、①単純移動平均線 (MA or SMA)、②指標平滑移

動平均線 (EMA)、③加重移動平均線 (WMA) を使用しました。

① SMA は、一定期間を対象にして算術平均で算出します。過去の価格トレンドを追随する分析法で、市場の動きに後れをとりますが、大きなトレンドの動きを教えてくれる移動平均線です。② EMA は、累積加重平均であり、直近の価格にウェートをつけます。SMA、WMA より市場の変化を早く表す移動平均線と言われています。高値ゾーンで EMA の上昇から下降への反転は売りシグナル。安値ゾーンで EMA の下降から上昇は買いシグナルとなります。③ WMA は、価格の重みを過去に向けて順次小さくするので、緩やかに上昇・下降時は威力を発揮します。乱高下やもち合い局面では利用価値が劣ります。

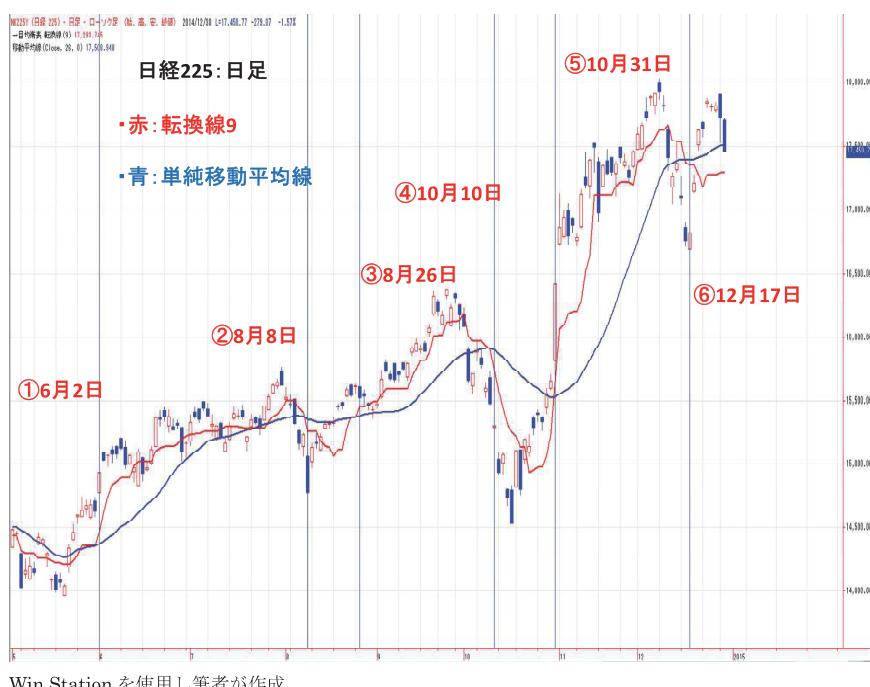
基準線とこれらの移動平均線が転換線を上抜け・下抜けした時点を売買日としました。

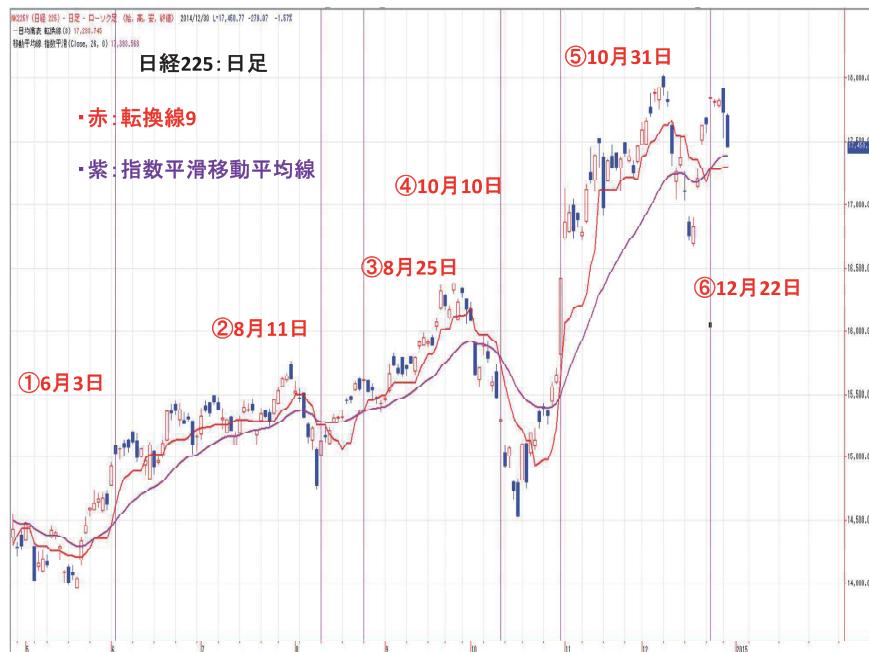
結果的には、WMA が基準線や他の移動平均線よりも早く『好転・逆転』のシグナルを出す傾向があります。ただ、7月30日の好転の後、直ぐに下落するなど度々ダマシが発生する傾向があります。基準線は全体的には『好転・逆転』のシグ

ナルが遅い傾向があり、大底圏や天井圏での売買にはなりませんが、ある程度トレンドを確認した後のシグナルとなります。そういう意味では、転換線と基準線が好転または逆転した時点で売買するというのも、それなりに結果が出ます。しかし、転換線の方向が反転したり、転換線まで戻りがあった場合はロスカットする必要があります。

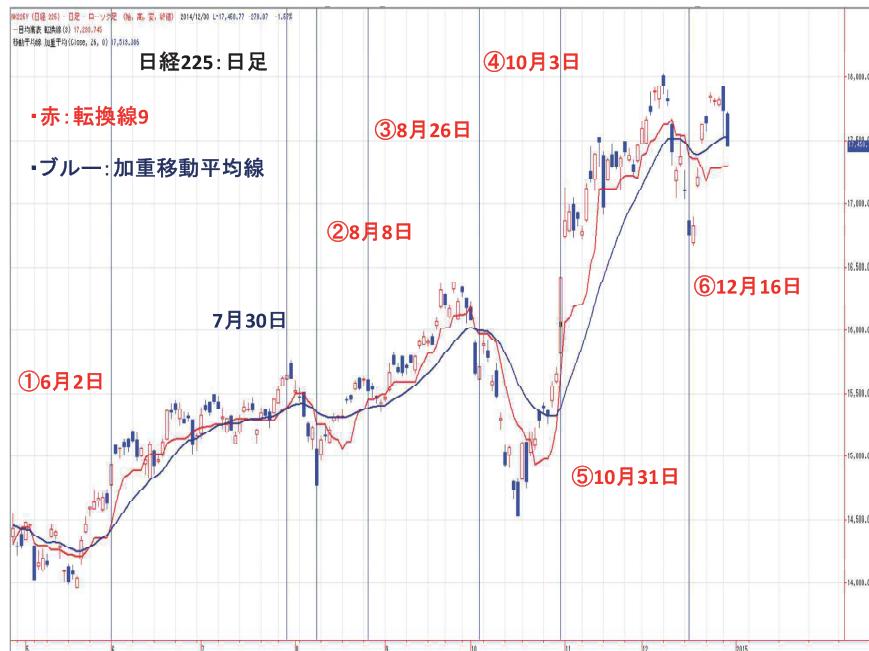
## 7. 先行スパン1と先行スパン2

先行スパン1は、基準線+転換線÷2で求めます。要するに基準線と転換線の中心値ということになります。相場において急上昇・急低下してしまうと、基準線と転換線の間隔が大きくなってしまうので、それをカバーすることになります。





Win Station を使用し筆者が作成



Win Station を使用し筆者が作成

## 基準線とその他の移動平均線比較

	①	②	③	④	⑤	⑥
基準線	6月3日	8月13日	8月22日	10月10日	11月4日	12月22日
SMA	6月2日	8月8日	8月26日	10月10日	10月31日	12月17日
EMA	6月3日	8月11日	8月25日	10月10日	10月31日	12月16日
WMA	6月2日	8月8日	8月26日	10月3日	10月31日	12月16日

Win Station を使用し筆者が作成

加重移動平均線が他の移動平均線よりも早く『好転・逆転』のシグナルを出す傾向があります。ただ、7月30日の好転の後、直ぐに下落するなど度々ダマシが発生する傾向があります。基準線は全体的には『好転・逆転』シグナルが遅い傾向があり、大底圏や天井圏での売買にはなりませんが、ある程度トレンドを確認した後のシグナルとなります。そういう意味では、転換線と基準線が好転または逆転した時点で売買するというのも、それなりに結果が出ます。しかし、転換線の方向が反転したり、転換線まで戻りがあった場合はロスカットする必要があります。

先行スパン1が上下に動くということは、転換線と基準線の中心値が動いたことになります。また、先行スパン2は52期間の高値+安値÷2で求めます。一目均衡表の1期の基本数値となる26期間の倍の期間となる52期間の高低の中心値ということとなります。先行スパン2が上下に動くということは、52期間という中長期的な高低の中心値が動いたこととなり非常に大事な現象と言えます。その数値を26期間先で結んだラインとなります。一般的には、一目均衡表では遅行線の動向が一番大事だと言われていますが、私的にはこの先行スパン1と先行スパン2の位置と動きが非常に大事だと考えます。一般的に先行スパン1と先行スパン2の間を雲と呼んでいます。上昇時は先行スパン1が上、先行スパン2が下となります。下降時はその逆で先行スパン2が上、先行スパン1下となり、その逆転した位置をネジレと呼びます。過去26期間前のネジレは、現在のトレンドに対して反転する可能性がある箇所と言われていますが、上昇時や下降時に加速する位置となることもあります。(当時は土曜日も取引日でしたので、3営業日前後ずれる

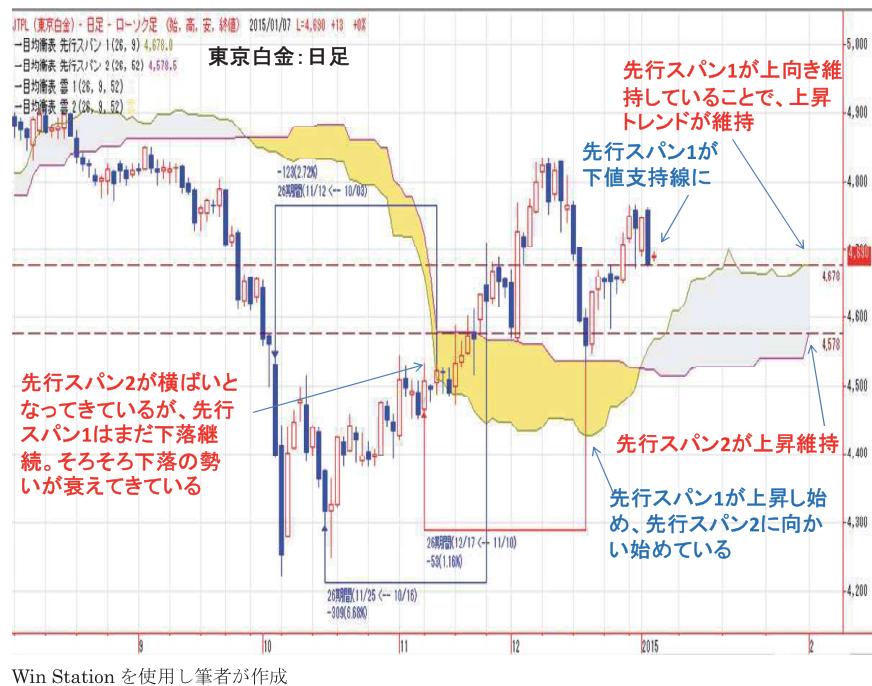
こともあります。) 26期間先のネジレは現在の価格変動によるものでもあり、先のネジレは現在のトレンドの変化と見ることができます。

また、一目均衡表チャートを見る時、今は上昇相場なのか、それとも下降相場なのかを先行スパン1と先行スパン2を見るだけで分かります。そして、26期間先でのネジレが大変大事になります。価格が雲を下抜け下降トレンドに入った後、底値から上昇に転じてくると、先行スパン1が切り上がり先行スパン2に接近していきます。その後、先行スパン1と先行スパン2がネジレとなり先行スパン1が上に先行スパン2が下になった時が「第四の好転」となります。逆に上昇トレンドから下降トレンドに反転した際に、先行スパン2が先行スパン1とネジレを起こし、その後先行スパン2が上、先行スパン1が下になった時が「第四の逆転」となります。この「第四の好転・逆転」については後述します。

気を付けて見ていく必要があるのは、26期間先にある雲の動きです。上昇期であれば先行スパン1が少しづつ上に切り上がり、先行スパン2も下値を切り上がる動きとなります。しかし、上



Win Station を使用し筆者が作成



昇に勢いがなくなると、先行スパン1は横ばいとなってきます。また先行スパン2も横ばいになったり下値を切り下げるような動きとなってきます。こうなってくると、上昇相場に勢いがなくなり揉み合い相場となってきたと判断します。下降期はその逆で、先行スパン2が上値切り下げてきます。また、先行スパン1も下値を切り下げてきます。やはり下降相場に勢いがなくなってくると、先行スパン2が横ばいになり、先行スパン1も下降から横ばい上昇という動きがでてきます。要するに雲の向っている方向とその変化に注意する必要があります。

## 8. 先行スパン2を現在時点に戻すと

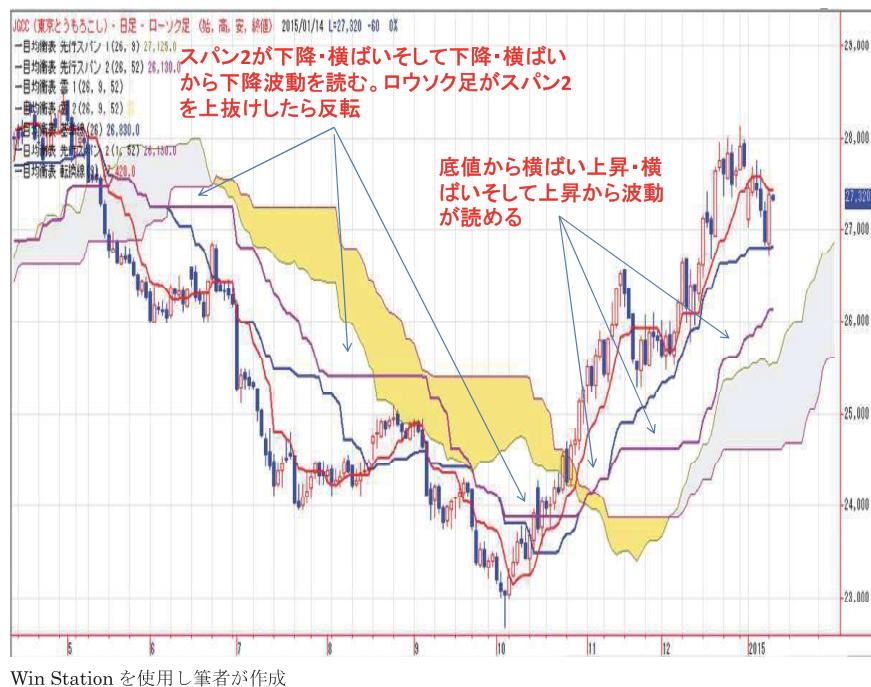
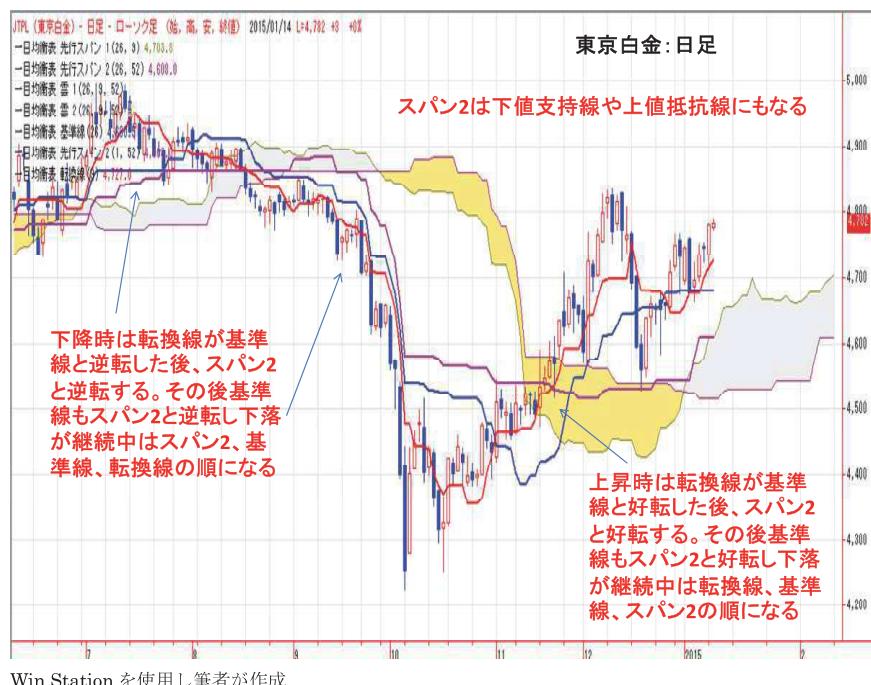
先行スパン2を26期間先に先送りしないで、現時点で表記すると、上昇時には転換線が基準線と好転した後、転換線は先行スパン2と好転します。そして基準線が先行スパン2と好転することになり、上昇が継続している限り先行スパン2は転換線及び基準線の下にあります。また、下降時には、転換線が基準線と逆転した後、転換線

は先行スパン2と逆転します。そして基準線が先行スパン2と逆転することになり、下降が継続している限り先行スパン2は転換線や基準線より上にあります。また先行スパン2は上値抵抗線や下値支持線となります。

また、先行スパン2は下降時には下降・横ばい・下降・横ばいというような波動形を作りボトム転換します。その際は横ばい中にロウソク足が先行スパン2を上抜けすると反転上昇トレンドに入ります。そして横ばい・上昇・横ばいを繰り返し波動形を作ります。この波動形で横ばいの期間あまり短いものは波動にいれず、10期間程度くらい長い期間を目安として1波動として数えることで、反転時を掴むことに役立ちます。

先行スパン1と先行スパン2の作った雲が、上値抵抗・下値支持となることはよく知られていることですが、26期間先の先行スパン1と先行スパン2に横ラインを引いてみると、何で価格が途中で止まったのかを発見することも多くあります。

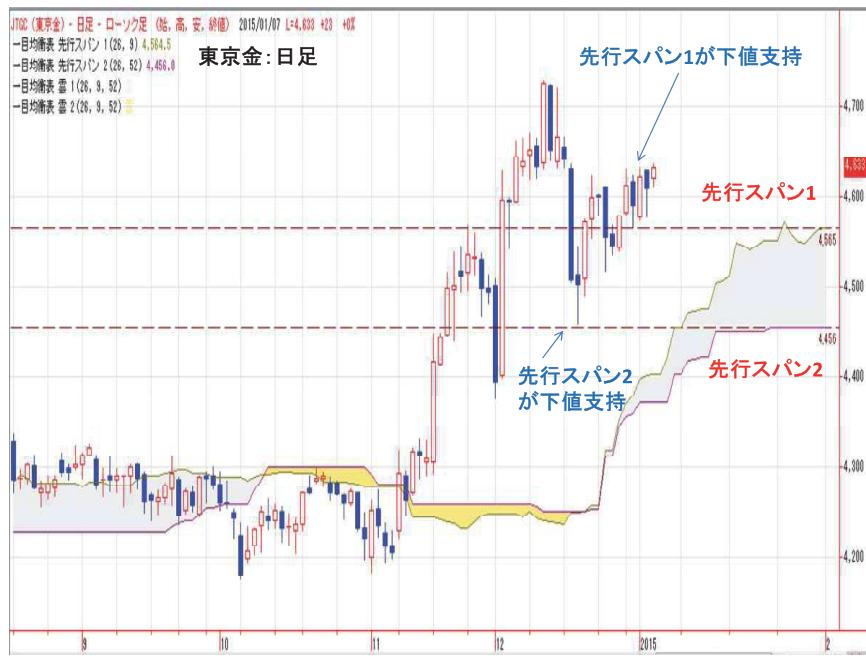
先行スパン2の使い道として、直近安値から先行スパン2をフィボナッチの50%に合わせま



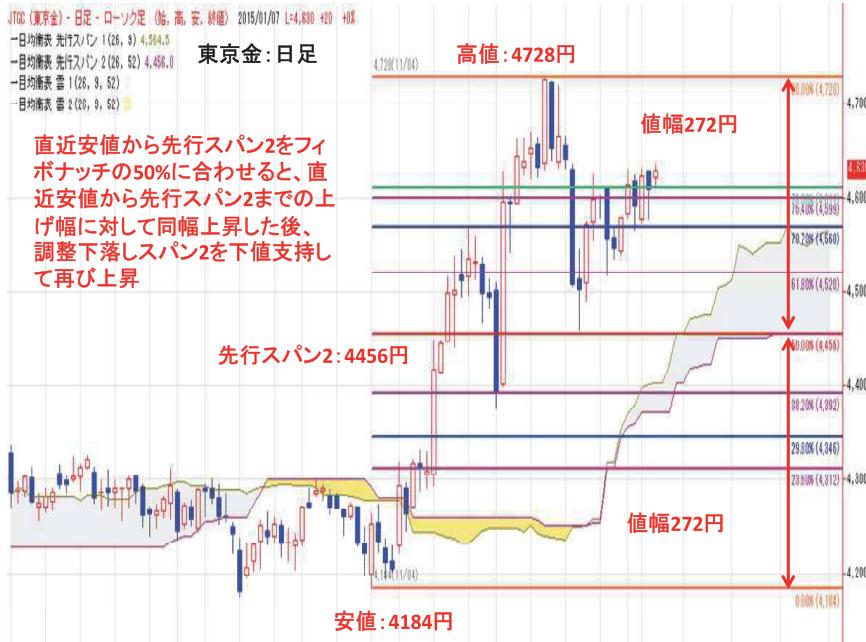
す。直近安値から先行スパン2までの上げ幅の倍まで上げ、その後いったん先行スパン2まで下落後再び上昇するということがあります。偶然の一致と思う方もいると思いますので、東京金と東京白金の2例を紹介します。一目均衡表では52期間の中心値となる先行スパン2が非常に大事な役目を果たしていますが、あまり先行スパン2

について書かれた文献は少ないように思います。

また、価格帯別出来高を重ねて見ると、先行スパン1と先行スパン2の間の雲の部分の出来高が多いことがよく見受けられます。要するに、雲の間は出来高の伴った売買の価格帯として見ることも出来ます。価格が雲を上抜けしたり下抜けしたりすることが度々ありますが、価格帯別出来高



Win Station を使用し筆者が作成



Win Station を使用し筆者が作成

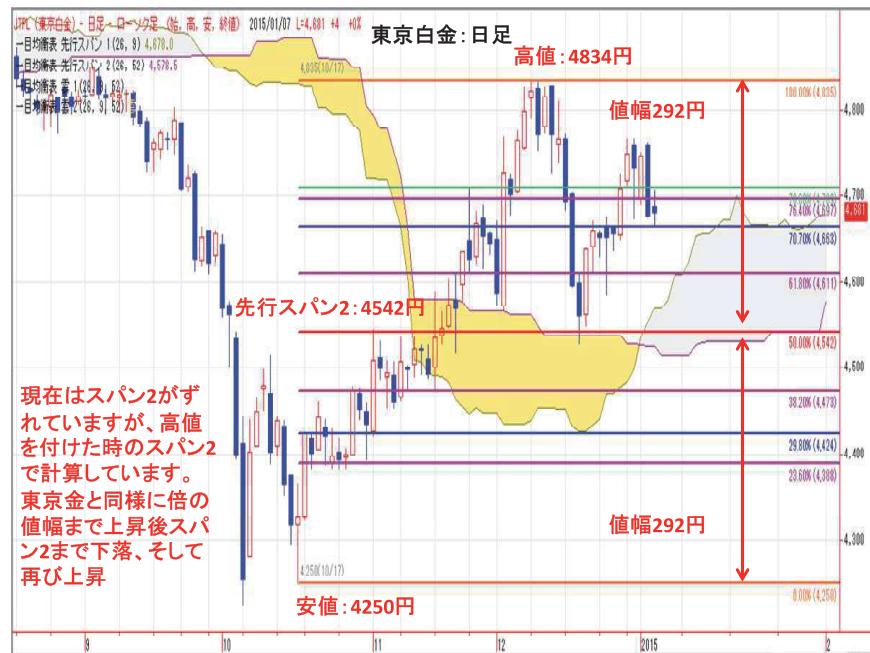
の出来高を伴った価格から抜けたことになるので、抜けた後は加速的な上昇や下降の動きとなることがあります。要するに出来高の多い価格帯を抜けたことにより、買い手と売り手のどちらかに含み益が生じ、その反対に含み損を抱えた投資家のロスカットが入りやすくなるからです。

## 9. 遅行スパン

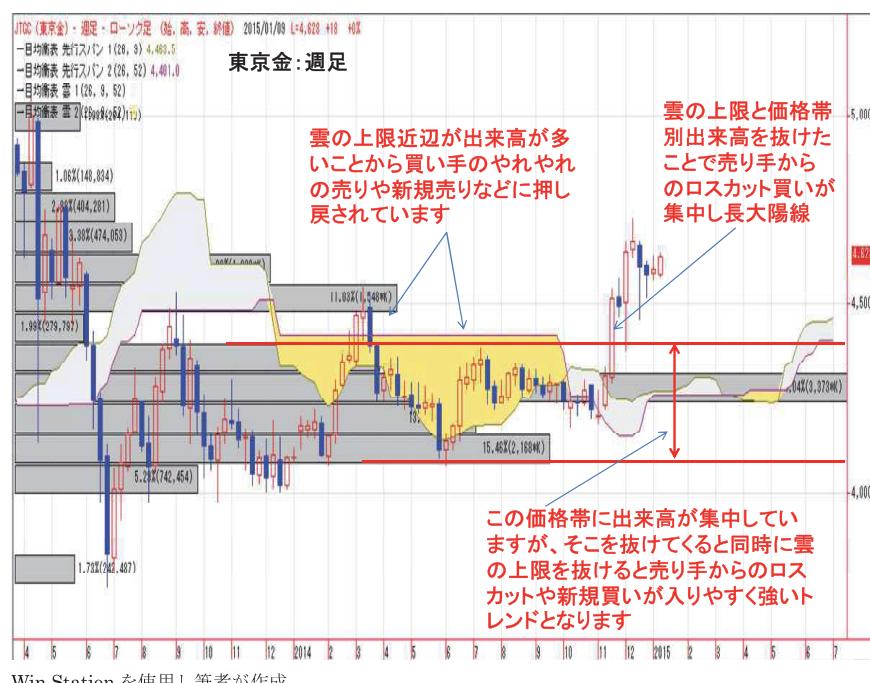
一目均衡表の中でも一番大事なラインと一般的には言われています。現在値を 26 日過去に戻した折れ線チャートと思ってください。遅行線がロウソク足を上抜けすれば上昇相場入り（好転）、

下抜けすれば下降相場入り（逆転）となります。上抜け・下抜けしないで 26 期間前のロウソク足が抵抗帯なることもあります。また、遅行線が雲の上限や下限を抜けずにトレンドを維持することも度々あるので、遅行線の位置とそれぞれの抵抗帯の位置関係を見極める必要があります。これもある意味価格帯別出来高との関わり合いがあると

思われます。26 期間前のロウソク足や雲の抵抗帯は、今まで売買していた投資家の平均価格を抜けてしまうことから、ロスカットや売り乗せ、買い乗せの投資行動が活発化するからだと思われます。一目均衡表の中で遅行線だけが、中心値という意味合いはありません。ただ、過去 26 期間に売買していた価格帯を上回ると買い手の含み益が



Win Station を使用し筆者が作成



Win Station を使用し筆者が作成

増え、下回ると売り手の含み益が増えるという意味から、買い手優位なのか、それとも売り手優位なのかを判断するものと思われます。

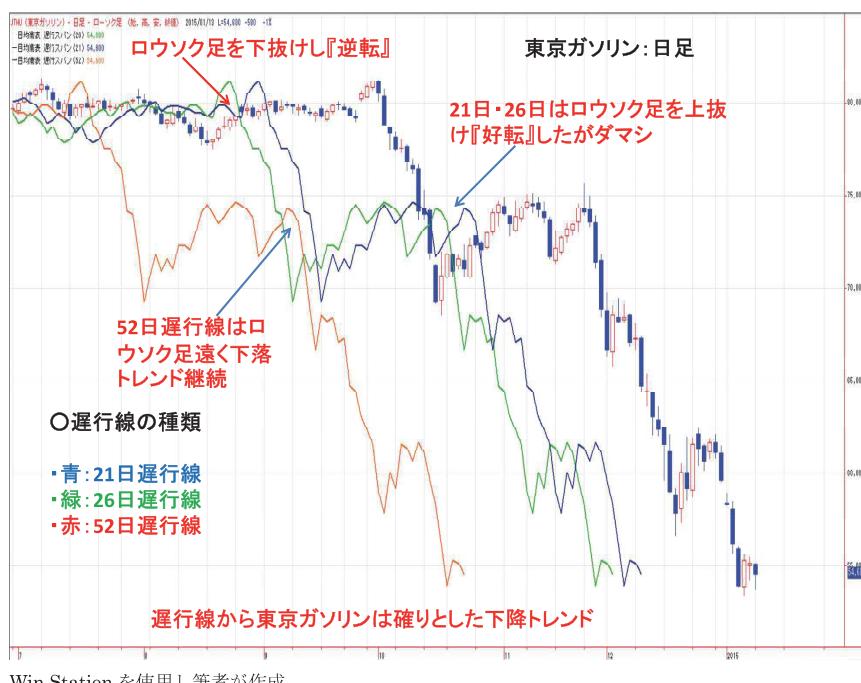
遅行線とロウソク足の好転・逆転で売買する方法もありますが、ダマシも多くロスカットを迫られることもあります。一旦ロウソク足を上抜け・下抜けしても再びロウソク足から抜けてしまったところでロスカットする必要があります。私は26日の遅行線のほかに21日遅行線と2期サイクル後ろの52日遅行線を入れています。21日遅行線は26日の遅行線の前にロウソク足と交差するので、前兆シグナルとしています。そして、52日遅行線で完全シグナルとします。21日・26日・52日遅行線が全てロウソク足を上抜け・下抜けしたら確りとしたトレンドが出ていることになります。ただ、3本の遅行線で取引すると、かなり上昇・下落した後の取引となってしまい現実的ではありません。また、色々とラインが増えすることで、チャートが見づらくなってしまうところが難点です。

## 10. 三役好転と三役逆転と第四の好転・逆転

一目均衡表には「三役好転」「三役逆転」という売買シグナルがありますが、転換線が基準線を上抜けし、遅行スパンがロウソク足を上抜け、そしてその後ロウソク足が雲を上抜けたら三役好転と呼びます。そのうえ各転換線と基準線が上向きとなったときが本当の三役好転となります。またその逆の動きが三役逆転となります。私はこの後に先行スパン1と先行スパン2で書きましたが、「四役好転」・「四役逆転」を確認しています。

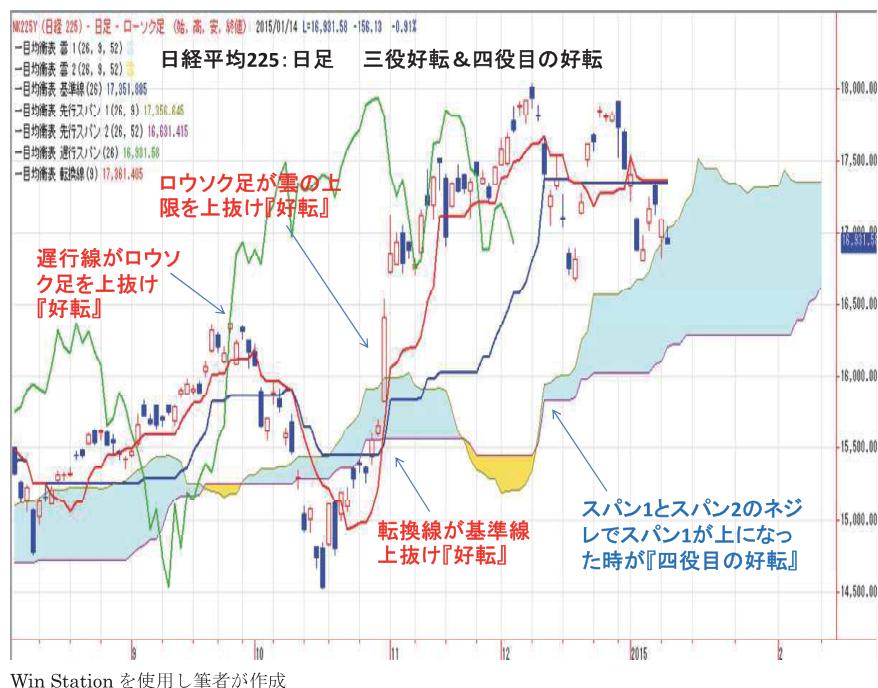
## 11. 指数平滑移動平均線

私の一目均衡表には必ず75期間指数平滑移動平均線を入れています。一目均衡表では5期間、9期間、26期間というどちらかというと短期的な動きに重点を置いていますので、指数平滑線の方向の変化を見ることで、中期的なトレンドの流れの変化を掴むことができます。また、なぜ指数

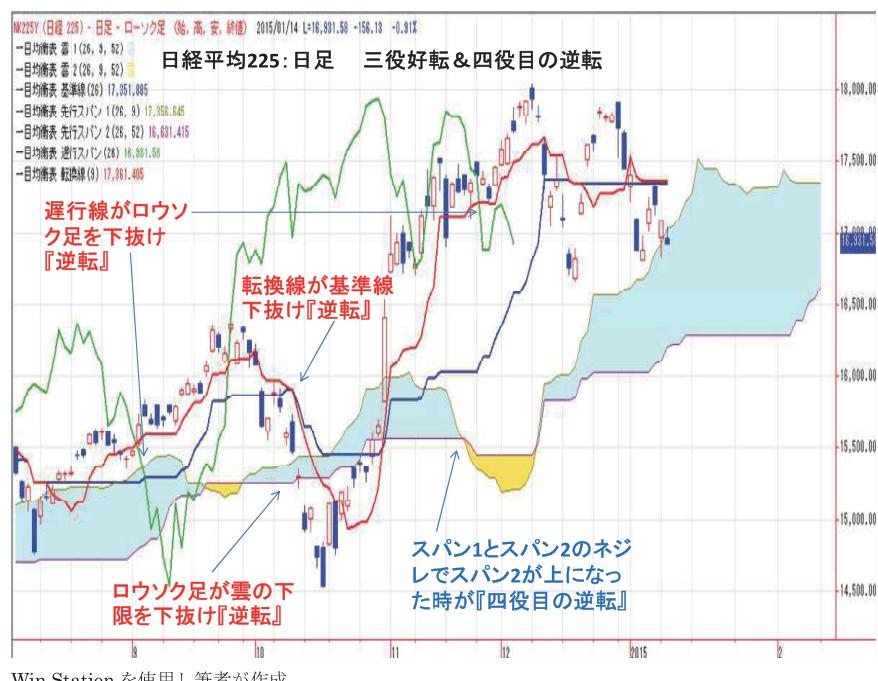


平滑線かと言いますと、75期間という中長期線なだけに出来るだけ直近価格の動きに比重を乗せている指標平滑線を利用しています。この指標平滑線が入ることによって、中長期のトレンドの変化を一目で把握できることがメリットです。驚くことに75期間指標平滑移動平均線が上値下値の抵抗帯となるケースが多くあります。

ちょっと話はそれてしまいますが、長年私が開催しているセミナーでは債券相場の動向が非常に大事であることを説いています。色々な市場はありますが、債券市場だけは個人投資家のいないプロ市場です。機関投資家であったりヘッジファンドのような大型プレイヤーが売買している市場です。そのため我々個人投資家にはない情報や情報



Win Station を使用し筆者が作成



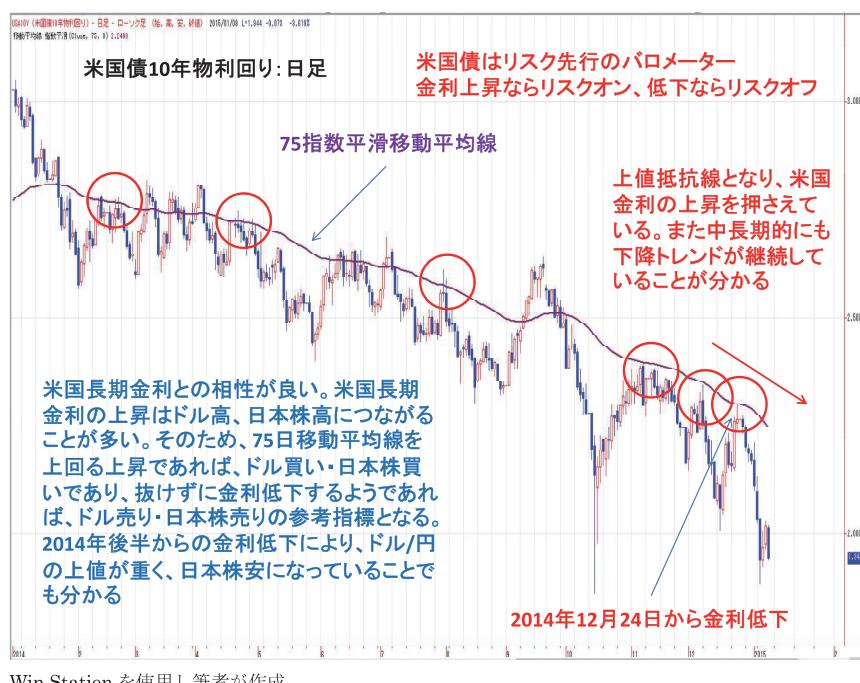
Win Station を使用し筆者が作成

のスピードのなかで売買されています。どうしても個人投資家が入る市場ですと、ストレートな市場動向ではなく、動向にノイズのような動きが出てしまします。それがダマシとなり、急激に反転してしまうことがあります。いつもブラックスワンは突然現れるのではなく、新興国債券の利回りが微妙に上昇はじめ、それと同時に流動性や格付けなどに問題のない国の債券利回りが低下し始めます。その後、新興国株に変化が生じ、飛び火して世界的に株価の下落となります。微妙な債券市場の利回り動向を把握することも、勝ち組投資家に入る一歩となります。

## 12. 米蔵風一目均衡表

米蔵風一目均衡表の形が出来上がりしました。形だけ真似をしたからといって直ぐには成果はできません。これは投資の全てのことについて言えることですが、どんなに有名なトレーダーの使用しているオシレータを使ったからと言って、そのセミナーに参加しただけで勝てるのならば、全世界の投資家が参加すれば誰も損をしないことになります。

す。あり得ないことです。米蔵塾でも塾生に同じことを伝えているのに、確実に利益を出している塾生とそうではない塾生がいます。そのため、努力と忍耐が必要です。自分のポジションの保有期間を決め、色々な時間帯にチャートを変え見比べることです。その商品と自分の投資時間に合ったチャートが見つかるはずです。ここで米蔵風一目均衡表をまとめてみますと、チャートを開いたら26期間先の先行スパン1と先行スパン2の位置関係をチェックします。出来たら、先のスパン1と先行スパン2のある位置から横ラインを引いてください。そして上向き下向きの方向もチェックします。続いて現在の先行スパン1と先行スパン2で作った雲と現在のロウソク足が雲の上なのか、下にあるのか位置関係をみます。雲の厚みも価格帯別出来高を意識しながらチェックします。続いて転換線5と転換線9の位置関係と方向です。そして基準線との位置関係もチェックします。そして、遅行線21、26、52の位置をチェックします。21遅行線は26を先行します。また26日の遅行にある52遅行線もチェックしてください。



### 13. 3つの時間枠

3つの時間枠を分析することで、その時間枠のなかでトレンドに沿って動いているものなのか、それとも現在の動きはあや戻しなのかを理解することで、自分が上下のトレンドの中で取引しているのか、それともあや戻しの動きのなかで取引しているのかが分かります。これを知ることが非常に大事なことです。先にも述べましたが、その投資家の取引時間で3つの時間枠が変わってしまいます。例えば中長期の投資で月足は下落、週足は上昇、日足も上昇だったとすれば、数週間から1、2カ月程度は上昇するかもしれません、長期的には下落していく可能性が高いことになります。また、デイトレードでも240分足が上昇、60分足は上昇、16分足が下落となっていたら、長い時間枠のトレンドに相場は動く可能性が高いので、16分足で買い場を探すことが合理的と判断します。ここで大事なことがもうひとつあります。長い時間足からチャート分析してください。科学的根拠はありませんが、最初にみたチャートトレンドが頭に残り、中長期のトレンドが疎かに

なりやすくなります。中長期のトレンドのなかで今の動向が逆に行っているのであれば、中長期トレンドの逆張り狙いで良く、中長期もトレンドが同じならば、トレンドに沿った順張りトレンドとなります。これはロスカットや利益確定に大きな影響があります。中長期トレンドに逆らった取引をしていることを十分理解して取引しているのならば、ロスカットも早く出来るはずですし、精神的に負担が少ないと思います。誰も好んでロスカットをする投資家はいないですが、トレンドに逆らって取引しているのならば、仕方ないという諦めもつきます。ちょっと、違うかもしれません、あるサッカーの選手が、試合で決着がつかず最後にPK戦になり、そこで負けても負けた気がせず精神的に立ち直りが早いと言っていたことを思い出します。また、上手くトレンドに乗れた時は、少し粘って利益を大きくすることも出来るからです。精神的にダメージが大きいのは、トレンドに乗れたと思ったときに何かの要因で反転してしまう時のロスカットは精神的にダメージが大きいです。自分にあった3つの時間枠探しは大変重要なとなります。



Win Station を使用し筆者が作成

## 14. 最後に

パソコンの普及は相場分析に画期的な変化をもたらしました。一昔前であれば、方眼紙に手書きでロウソク足を付けていくのですから、分足などを使って取引するなど不可能に近いことでした。現在はパソコンに映しだされたインターフェイスのボタンを押すだけで、ティック足から月足まで自由に即分析できる時代となりました。また、オシレータも自分で計算する必要はなく、そのインターフェイスに組み込まれているオシレータであれば、投資家が好きなものを選べば既定値に沿ったオシレータが画面に現れ分析することができるようになりました。簡単で便利になったことで、初心者からプロまで同じチャートを見て投資出来るようになりました。要するにチャートという情報コンテンツにおいては、プロも素人も同じ舞台にいるということです。使うコンテンツを理解した上で利用すれば、素人でもプロに立ち向かっていけます。今回は一目均衡表を使う上で、価格が変動した際にチャート内の変化がどう言う意味があるのか？また、ツールを加えたことにより価格の変動の読みが出来ることをご紹介しました。また、他のツールとの比較検証することで、一目均衡表のメリット・デメリットも理解されたと思い

ます。そして直接的には一目均衡表とは関係はありませんが、投資する際のちょっとした考え方などもご紹介しました。一目均衡表は奥が深く全てを理解することは、並大抵のことではありません。そのため、今回はほんの一部をご紹介しました。しかし、より実践的な考え方ですので、大いにご利用頂ければ幸いです。

冒頭に書きましたように、小学生からの創意工夫癖から、私は投資をする際の重要な羅針盤である一目均衡表の分析の考え方や、どのようにすればより利益が出るチャートになるかを研究してきました。研究結果としては、一目均衡表を『米蔵風一目均衡表』として工夫を加え売買タイミングを計る羅針盤として使用することによって、トレンドに乗る時、逆張りする時、そして様子を見るタイミングが以前より明確に分かるようになりました。そして、一目均衡表の有効性が高まったことです。今後も投資において、一目均衡表の精度を上げるための研究を継続していきます。

以上

### ＜参考資料＞

『日本テクニカル分析大全』 日本テクニカル協会編 日本経済新聞出版社